

# キリスト教保育連盟 関東部会だより

2012年度 主題

「今、この時」

第103号

2013年3月発行

主題聖句「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ローマの信徒への手紙5章5節)

## 巻頭言

### 『自由遊びの大切さ』

熊谷 文男

昨年の三月に文部科学省から「幼児期運動指針」が出されました。まず驚きましたのには、「特定のスポーツ・運動」、体操、水泳、マット運動、跳び箱、サッカー、マラソンなどを幼児期に行うのは良くない、とはっきり書いてあったのです。幼稚園でも、専門家に依頼して本格的な体育指導を取り入れるところが多くなっていますし、お子さんに体操やサッカーなどを習わせているご家庭もあると思います。ところが、約九千名の幼稚園児を対象とした研究で、体育の指導をすればするほど運動能力の点数は下がってしまうことが明示されています。指導は行わずに砂場、ブランコ、ボール遊び、鬼ごっこなどで自由に活発に楽しく体を動かして遊ぶこと、すなわちめぐみ幼稚園の様に自由遊びの時間を十分に取っている園の子どもたちの運動能力が最も高かった、と述べています。

実は、この「指針」を読んだ直後に、何名かのお母さま方から「できれば、外部の体育専門指導員を入れての体育指導を行って欲しい」との要望が寄せられました。一旦はこの「指針」の説明をしようか、とも思いましたが、筆者自身がこの「指針」の根拠を詳しく知りませんでしたし、必ずしもその内容に納得していませんでしたので、即答はせずに回答を保留しておりました。

秋になりました、この「指針」を中心となつて策定された東京学芸大学名誉教授の杉原隆先生に直接お会いして、理論的な根拠をお聴きする機会がありました。

杉原隆先生については、本年元旦の朝日新聞に関連記事が掲載されておりましたので、お読みなつた方もおいでになると思います。杉原先生にお会いして、ようやく納得ができました。幼児期・児童期は、「中枢性機能」、すなわち知覚や脳機能や運動コントロール力などが発達する段階であり、それに対して、青年期は、「末梢性機能」、すなわち筋力、持久力、瞬発力などの運動能力が発達する段階であることを説明してくださいました。このことより、八歳から十歳くらいまでの時期は、限定された運動指導をするのではなく、自由遊びの中で体を動かしたり音楽を楽しんだりすることこそが、結果的には運動能力もより優れ、社会性もより身に付くバランスの良い成長をもたらすことを実証しています。ちなみに、特定の種目の体育指導は、待ち時間が長くなったり、技術の優劣がついてお子さん同士は勿論、保護者の皆さんの関係も悪くなったりするそうですし、一番の問題は、ほんの一部のお子さんを除いて、楽しくなくなつて、やる気がなくなつてしまふことだそうです。

正に目からうろこです。筆者の幼稚園時代には、確かに特定の種目を教わったことはありませんでした。自分たちが作ったルールで自由に楽しく遊んでいたような気がいたします。この遊びから、基礎的な体力や運動能力を発達させ、たくさんのお友だちとの関わりを通して、コミュニケーション能力、やる気や集中力、社会性や認知的能力などを育むことができたのでしよう。

時代と共にあらゆる学問が進み、色々なことが分かってきました。しかしまだまだ、分からないことだらけです。私たち人間の想いを越えて大きな力が働いてい

るのは間違いありません。

「この現実の中で、どこによりどころを見出せば良いのでしょうか。そのことを考える時、誰によって創造されたのかという原点に立ち返って見ると答を得ることができません。神は人間をご自身の形に創造されました。ここに神の愛があることを再確認し、神に祈り求める時、何をすべきなのかを、また、『変えてよいもの』と『決して変えてはいけないこと』を示してくださいます。私たちは日々、保育の場にあつて子どもたちとともに過ごしています。その中で子どもたちの成長にはプロセスがあることを知っています。そのプロセスはどんな時代でもどのような社会状況の中でも、またどのような子育て環境の中にあつても『変えてはならないもの』です。このプロセスの中で最も大切にしたいのは、子どもたちが『その時々をその子どもらしく充実すること』ではないでしょうか。『一日一日を心満たされて過ごし、今日も本当に楽しかった、明日もやってみよう』と子どもたちが一人ひとりが『今、この時を』生きることによつて希望に満ちた未来が見えてくると思います。そのような子どもたちの生活を支え、援助するためには何が必要なのかを共に学び、祈り合う一年でありたいと願っています。(今年度の「主題解説」より一部改変)

(常盤台めぐみ幼稚園園長)

